佳作

「描く」が好き

秋田県大仙市立仙北中学校
３年　藤嶋　梨瑚

「絵を描くことが好き。」

未来の私に、この気持ちを忘れないでいてほしいという思いから「絵」との思い出をこの作文に残そうと決めました。

いつからこの気持ちが芽生えたのだろう。それが何歳だったかは、あまり覚えていません。私の家には、幼い頃に描いた絵が残っています。細かいことを気にせず、思うままに描いた絵。それを描いたあの頃から現在まで、絵を描くことを楽しみ続けています。

小学校３年生の頃。父から画材を買ってもらったことを今でも鮮明に覚えています。イラストの本を真似しながら夢中で描きました。同じ趣味の友達も増え、一緒に絵を描くことを純粋に楽しんでいました。

小学校５年生の時、父が使わなくなったタブレットをくれました。ＳＮＳを通して、これまでよりたくさんの作品に触れる機会が増えました。さまざまなイラストの中で目に入ったのはある一つのイラストでした。細部までよく描きこまれていて、パーツに説得力のある絵。そのイラストを描いたのは、自分と同い年の子でした。自分よりはるかに上手なその絵に、衝撃を受けました。この時から私の心の中に、魅力的な絵を描く人たちへの「憧れ」の他に「不安」や「焦り」という感情がはっきりと表れ始めました。ＳＮＳで魅力的な絵を見ることで、自分との差に落ち込み、絵を描くのが億劫になったこともありました。しかし、それを原動力とすることで、モチベーションを保ちました。クリエイティブな世界の広さに気付かせてくれる、競争心を芽生えさせてくれる数多くのライバルの存在は、絵を描き続けるためには必要なことだったのだと、今では思います。

小学校６年生の時、数年間貯めた貯金で新しいタブレットと電子ペンを買いました。初めてデジタルイラストに触れたのがこのときです。小学校を卒業するまで、時間を忘れるほど没頭し、ひたすら描き続けました。

中学校に入学し、造形部に入部したことで、家で絵を描く頻度は徐々に減っていきました。「うまくなりたい」という気持ちはあったものの、そのために何かする、という明確なことはしませんでした。

そんな時に出会ったのが、あるイラストレーターの動画です。イラストを披露するだけでなく、絵を描く人に寄り添うようなアドバイスや、体験談などが

盛り込まれていました。動画を見ていると、不思議と創作意欲が湧いてきて、「今のままではダメだ」と感じるようになりました。

それから私は、自分から絵について学ぶようになりました。どんなことでも絵に生かせるようにと、日常の物の形や光の当たり方など、些細なことにも目を向けるようにしました。その他にも、動画で勉強したり、資料本を買ったり。実際に自分の絵に応用し、納得のいく絵を描くことができた時の達成感と、それが知識として自分の中に蓄積されていく感覚が大好きです。

中学校３年間の部活の集大成として、秋田県美術展覧会の洋画部門に出品しました。これまで学んできた技術を生かし、今までの作品で一番の時間をかけました。締め切りぎりぎりまで描き続け、入選という賞をいただくことができました。自分の作品が誰かの目にとまり、認められることの嬉しさを実感しました。

受験生となり、進路や将来のことを考える機会が増えましたが、将来の夢は明確には決まっていません。正直、今の私には、憧れたイラストレーターのようになっている未来は想像できません。詳しく調べると、厳しい現実も少しずつ見えてきました。インターネットが普及したことで、自分の作品を発信しやすくなった反面、多くのコンテンツが溢れかえる中で、その作品が日の目を見るのはそう簡単ではありません。私には、厳しい世界に飛び込む勇気がまだありません。ですが、私には、確かな気持ちがあります。

「絵を描くことが好き。」常に新しい気持ちでそう思います。私は文字や言葉で表現することがあまり得意ではありません。「絵を描くこと」は、そんな私に表現の場を与えてくれました。絵は、文字や言葉がないからこそ、一人一人が自分の解釈で、自分の世界を広げることができる。その良さに気付き、絵の世界に没頭できていることが、私にとってとても幸せです。

10 年後の私へ。10 年後の自分は何をしているのでしょうか。絵を仕事にしようと思えているのでしょうか。私がきっかけをもらったように、誰かにきっかけを与える存在になれていることを少しだけ願っておきます。15 歳の私の、「絵を描くことが好き」な気持ちを、いつまでも忘れないでいてください。